モネの森

aoneko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モネの森

【Ｎコード】

Ｎ３８３９Ｄ

【作者名】

ａｏｎｅｋｏ

【あらすじ】

男爵子息として何不自由ない暮らしを送ってきたモネ。十六歳のクリスマスイヴの晩に不思議な少女と出会ったとき、運命の歯車が回りだす。

第一話：雨の前

今日は雨だ。明日は雨だ。明後日も明々後日も。百年後だって雨なんだ。僕らの森はずううっと雨だ。ここはアマ森。永遠の雨の森。

『モネ様。起きてください。モネ様。坊ちゃま。』

耳慣れたしゃがれ声が眠りをかき乱す。

『うるさいなあ。もうちょっとだけだよ。あと五分寝かしてくれよ。』

そう言うと、モネと呼ばれた少年は掛け布団を上にひっぱり上げた。

『坊ちゃま。さっきからその台詞を何回聞いたと思っているのですか。今度という今度は起きていただきますよ。』

マーサは少年から布団を勢いよく剥ぎ取った。

『ひえええ。寒いよ。返してよ。マーサの人でなし！』

少年はなおもベットの上でかたつむりの様な格好で抵抗している。

小柄で、今年１６歳になるとは到底見えない容姿である。薄茶色のくしゃくしゃ頭は五歳の時から変わっていない。

『今日はクリスマスですよ。クリスマス位早く起きたら、どうなん

です。奥様もお姉さまも二時間も前に起きていらっしゃりますよ。』

大柄なマーサが太い腕を組むとすごい迫力である。きっと肩幅も腕もモネの三倍はあり、村で行われる男女混合腕相撲大会の６年連続チャンピオンでもある。

『父さんは？』

モネは体を震わせながら、なおも抵抗した。部屋の中はストーブをつけているのに、息が白く見える。

この家の者は誰でもモネの寒がりと低血圧は父親譲りであることを知っている。

『旦那様は・・・。姉が起しにいっておりますが。』

マーサは声を落とすと、小さく咳払いした。マーサには二つ年上の姉がいて、名前はテレサというが、腕っ節の方も妹に負けず劣らずといったところだ。

『ぎゃー。起きる。起きるから許してくれ。』

上の部屋からモネの父親であるパロット男爵の悲鳴が聞こえた。

『今、ご起床なさいました。』

マーサはにんまりと笑った。

『分かった。起きるよ。』

最後の砦を失ったモネはのそのそと起き上がった。

モネはリゾットに入ったグリンピースをいじりながら、ため息をついた。

クリスマスほど憂鬱な日はない。朝早く叩き起こされ、極寒の礼拝堂に行き、2時間も説教を聞いた後は、国王主催の退屈なパーティーで朝まで過ごす。悪夢以外なにものでもない。聖夜なんてよく言ったものだ。

『モネ。お行儀が悪いですよ。それになんです、お食事をいただく時はきちんと姿勢を正しなさいといつも言っているでしょう。』

パロット夫人が上品に口の周りを拭きながら、言った。ガリガリに痩せた体に身に着けた緑のロングドレスがどことなくカマキリを連想させた。

『はいはい。』

モネはスプーンを置くと、椅子を引いて背筋を伸ばした。

『はいは一回でよろしい。それになんです、今日はクリスマスなのに、こんな時間まで寝ているなんて。』

夫人は一つ文句をいうと必ず、もう一つ小言を追加する。それになんですというのが彼女の口癖である。モネは目を閉じた。

『無駄よ、お母様。モネはちっとも聞いていないし、お父様だってまだ起きてきてないわ。』

パロット夫妻の長女、ミレー・パロット嬢はクスクス笑いながら、デザートのヨーグルトを口に運んだ。容姿、品行共に男爵令嬢として申し分ないのだが、殊に性格となるとモネは首を傾げてしまうところだ。つまり、感じが悪い。

『おはよう。おっと、ごめんよ、マーサ。』

ミレーの言葉と同時に、食堂に入ってきたパロット男爵がマーサにぶつかった。小柄な男爵がマーサの横に立つと小人のようにみえる。

『やあ、おはよう。』

笑顔でそう言った男爵の顔が次の瞬間、引きつった。

『あなた?今何時だと思ってらっしゃるの?』

夫人の鋭い目が夫を捕らえた瞬間だった。

じっとりと湿った風が頬を撫でた。風はゆっくりと落ちてくる雨粒をすくい上げながら、森を通り抜けていった。

天に向かってうねるように伸びる大木の傍らで少女は目覚めた。

少女といっても少女と分かるのはその長い小麦色の髪のせいで、見事に凹凸のない体型や汚れた顔を見ると、少年にしか見えない。少女が伸びをしていると、後ろの茂みがガサガサと動いた。

『シャーミ。起きたの？』

茂みから、よく見知った顔が出てきた。一目でそれと分かるほどの美少女である。真っ白な肌に赤い唇、つやつやと光る黒髪は異国の雰囲気を漂わせている。それに長いまつげで縁取られたエメラルドグリーンの瞳は、何度見ても息をのむほどの美しさである。

『もうみんな出発したよ。シャーミはもっと早く起きたほうがいいと思う。』

顔に似合わないぶっきらぼうなしゃべり方をする。

『ごめん、スーラ。昨日、どくだみが沢山生えている場所を見つけたから、沢山摘んできて煎じてたら、寝るの遅くなってちゃったの。きれいな水のそばに生えてるどくだみなんてひさしぶりだから。』

シャーミはちっとも反省していなさそうな顔でスーラに笑いかけた。笑い方も少年を思わせるいたずらっぽい笑みである。

『約束を守って、シャーミ。明日にも私達は王宮に入る。約束を守れないのでは、すぐ国に帰るよ。』

スーラはそこまで言って、シャーミの顔を見るとため息をついて顔をそむけた。

『泣くのは反則だよ。』

『だって・・。』

シャーミは鼻をすすり上げた。

『遅いぞ、二人とも。特にスーラ。お前がいるのといないので、男性客の数が2倍違う。』

がっしりした大男は遅れて現れた二人の少女の前に腕を組んで立ちふさがった。声を聞けば怒っていないのが分かる。

『・・どうも。』

大してうれしくもなさそうにスーラは答えた。

『ミロ団長。私は？』

シャーミは上目がちにほめ言葉を待った。

『シャーミ、お前はもっと技を磨け。お前は身軽しか取り柄がないんだからな。』

ミロはきっぱりと言い切った。

第二話：モンブラン

『寄ってらっしゃい見てらっしゃい。今日の目玉は空中ブランコだよ。宙の舞うのは蝶だけじゃない。大陸一のブランコ乗り、セザンヌ嬢の華麗なる空中芸をとくと御覧あれ。』

景気のいい掛け声で、モネは目覚めた。馬車に差し込む日差しが暖かくて、ついうとうとしてしまったようだ。

最近、ヒマさえあれば眠っている気がする。目覚めたとき、いつもなにか夢を見ていたような気がするのだがよく覚えていない。なんとなく耳に残っているのは雨音だけである。

窓の外を覗くとなるほど騒がしいのも当たり前で、馬車が走っているのは首都モンブランの城下町である。

いつ来ても、溢れんばかりの人でごった返している。今日はクリスマスイヴとあって、馬車は人の波に揺られながら3分に一メートルのペースで進んでいる。

『見て見て、スーラ。あれ、綿あめかな。後で絶対見て回ろうね。』

シャーミは周りをきょろきょろ見回しながら、前を歩くスーラの服の袖をつかんだ。赤く染まった頬からも少女の興奮ぶりが分かる。

『それより早くお風呂に入りたいよ。こんな恰好じゃ目立ってしょうがない。』

スーラは不機嫌そうに周りを見渡した。さっきから視線が気になってしょうがない。長旅で泥だらけになった二人はクリスマスイブの華やいだ街中では、一際目立っているようだ。

『別に汚れてなくたって、スーラといれば目立ってるもん。』

シャーミはまださっきの団長の発言を根にもっているらしく、小声で文句を言った。

『ふーんだ・・あ、あれじゃない？ショコラ亭って宿屋。』

言い返そうとしたスーラの耳にシャーミの無邪気な声が聞こえた。

ショコラ亭の店主コロネ氏は二人の奇妙な客の対応に少し困っていた。

『お風呂の付いてる宿屋さんてここですか？』

目の前に立っているのは汚れたマントにすっかり色あせたベレー帽をかぶった少年で、どこからどう見ても町一番の高級宿に合わないお客だった。

『そうだけど、君。お金持ってるの？銅貨なんかじゃ泊めてあげられないよ。』

やっと開いた口で、コロネ氏はため息交じりに言った。

『お金なら持ってるよ。一時間お風呂を貸し切りにしてね。』

そう言うと、少年は首にかけている革のポケットの中から一週間分の宿泊料にあたる金貨三枚を取り出した。なにか言いかけようとしたコロネ氏に目に黒い髪が飛び込んできた。

『シャーミ、一人で先行かないって約束だよ。』

汚れた格好でも自然に漂う優雅な雰囲気と美しい容姿は誰が見ても明らかである。

『お姉さまもご一緒でしたか。ささ、坊ちゃまもここにおかけになって。お風呂ですね？すぐにご用意いたします。』

スーラが現れると先ほどとは打って変わった態度とると、店主はそそくさと去って行った。

『シャーミが先にお風呂入って。』

浴室の前で荷物を下ろすと、スーラは中の物を出して整理を始めた。

『一緒に入らないの、“お姉さま”？』

シャーミはニヤニヤしながら、尋ねた。

『自分だって、さっき店主に男だと思われてたくせに。』

スーラはいつも無表情の顔を少し赤らめながら言い返した。白い肌

がピンク色に染まる。シャーミはうっとりとため息をついた。

『スーラって本当にきれいだよね。ミロ団長だって気づいてないよ。スーラが男の子だってこと。』

周りに誰もいないのを見て取ると、長い黒髪のかつらをうっとおしそうに外した少年は不機嫌そうにシャーミを睨んだ。

・

第三話：雨雲

モンブランの町はその名の通り、緩やかな坂道が螺旋状に上に向かってのびており、城壁や道路に黄色がかったクリーム色の大理石がふんだんに使われた町は外から見ると、モンブランのように見える。その影響か市民もお菓子好きが多く、町にはいつも甘い香りが溢れている。

モネを乗せた馬車は少しずつ、モンブランの頂上、つまりバレンタイン城へ近づいていく。

バレンタイン城の城主であるルノワール7世は首都モンブランを含む7都市を治める、ババロア王国の現国王である。ちなみに、大の甘党で齢７０にして、大好物はショートケーキ。

大陸の3分の1を占める大国にもかかわらず、ババロア王国は現国王の暢気な気性をくんで、戦争や他国への侵略行為などからは無縁なのどかさを保っている。もっとも、大陸自体、小国が自国内での支配権を巡って小紛争が起きる位で、大陸を揺るがせるような大きな戦争はここ１００年一度も起きていない。

馬の足音が止んだ。ようやく、馬車は頂上に着いたようだ。

モネの目に緑地に白い一角獣が描かれた国旗がはためくのが映った。

城門の上に重ねて取り付けられた二つの旗が揺れるたび、モネの心臓はどくんどくんと音を立てる。

城門の前に立つ兵士の着ている真鍮の鎧や彼らが持っている先端がキラキラ光る槍は少年の心を奪うのに十分すぎるほどだった。

安穏とした日々をそれなりに楽しく送っているつもりだが、モネも他の少年と同じく兵隊や戦争に対して漠然とした憧れを抱いていた。戦場で手柄を立てて、英雄となる。戦争を一度も味わったことのない者の幼い考えである。

平安の１００年という年月はこのような者を多く生み出す。

『いいから、早く入りなさい。』

スーラの有無を言わさない口調に、シャーミは肩をすくめると、はあいと言って浴室に入っていった。

後に残されたスーラはため息をついた。

『もう６年か。』

もうすぐ、あの無邪気な金髪の少女ともお別れである。６年は長いようで、短かった。

僕の初めての仕事が終わろうとしている。

スーラは手に持った漆黒の長いかつらを見つめた。彼の短い地毛と

同じ色のかつら。あまり好きな色ではない。スーラはその長い髪をかぶり始めた頃のことを思い出していた。

第三話：雨雲（後書き）

ゆっくりですが、良いラストが迎えられるようがんばって書いていきます。今日のテストが悲しい結果だったので、三話はちょっと暗い感じです。

第四話：親愛なる甥へ

親愛になるわが甥スーラへ

長い間連絡を取らなかった叔父からの突然の手紙に君は驚いているだろう。正直私も君に手紙を書こうとは思わなかった。

時間があまりなかったものだから、随分ぶしつけな内容になってしまったことをここに詫びよう。

この手紙を書いたのは君にある頼みがあったからだ。君が憲兵学校を優秀な成績で卒業したのは私の耳にも入ったよ。おめでとう。勉学ももちろんだが、君は特に武術に長けているらしい。

そこでどうだ、用心棒の仕事をしてみないかね？これは提案というより私からのお願いだ。ある少女の警護をしてもらいたい。

仕事の条件および内容は以下の通りだ。

依頼主：：私ということにしておこう。

警護対象：シャーミ・コクトー（１０歳）

内容：：：２４時間体制による身辺の警護

期間：：：今のところ無期限としかいいようがない。決まりしだい君に報告する。

報酬：：：：銀貨1樽以上。一ヶ月に一度なんらかの形で生活費は支給する。

君がその家を出たがっているのは知っている。私も若い頃はそこが大嫌いだった。報酬は君一人だったら、一生遊んで暮らせる額だ。家を出るには十分すぎる位だ。

それともう一つ、警護は国から国への移動形式で行いあくまでも隠密に行動してほしい。どんなスタイルでもかまわないが、それだけは約束してもらいたい。

もしも、この仕事を請けてもらえるならば、12月23日の夜7時に旧タルト宮殿前に来てほしい。

ニコラ・ジャンセン

第四話：親愛なる甥へ（後書き）

回想の前にお手紙から。『あらあら、かしこ』っていう表現を使うのが夢です。

第五話：僕の回想１

『私のかわいいスーラ。お前は本当にかわいらしい。まるで女の子のようじゃないか。愛しい私の娘。』

母親のことが嫌いだった。

母親は僕がまだ生まれる前に僕の父親である夫に置いていかれた悲しみで、男を嫌悪するようになった。

自分の子供の性別が男であることさえ、彼女は受け入れようとしなかった。

女の子のような格好をさせられて、いつもままごとや人形遊びを強いられた。

本当に幼い頃はそんな母親に疑問を持たなかったが、時が経つにつれておかしいと思うようになった。

僕は、男だ。

１０歳の時、フェンシングを習いたいと言ったら、大泣きされた記憶がある。

『ダメよ、絶対に許さないわ。女の子が剣を習うなんて。母様はあなたにいつもおしとやかに女らしくしていてほしいの。』

そんな母親を目の前にして、頭の中で何かがプツリと音を立てて、切れた。

１２歳の時、僕は家を飛び出して、憲兵学校に向かった。

門の前で何度も何度も頭を下げた結果、下働きをしながら訓練や授業に参加させてもらえることになった。

居所探し当てた母親が何度も帰ってくるように言ったが、入学を許してもらえないのなら縁を切ると言ってなんとか許可を得た。

華奢で女らしい顔をした僕は他の訓練生や教師に馬鹿にされながらも、死に物狂いで努力をした。とにかく自立しなければと強くなりたいと切に願った。

僕が憲兵学校を最年少で卒業したのは１５歳の秋だった。武術において、学校の中にはもう僕に勝てる者がいなくなったからだ。

とにかく卒業すれば、職にありつけるだろうと思っていた僕の考えは甘かった。教師に媚びを売らなかったのが悪かったのか、卒業が早すぎたのか。

どちらにせよ、僕は家に帰る他なかった。

家に帰って1ヶ月、僕はとにかく自立資金を溜めることにした。母親に黙って便利屋のようなものをやっていた。

そんな頃だ。数えるほどしか会ったことのない叔父からあの手紙が届いたのは。

報酬はもちろん、旅をしながらの警護というのが魅力的だった。母親からこの家から離れることが出来る。

叔父の用心ぶりから推察できるのは、命の危険もあるということだったが、死など今更怖くないというのが僕の本音だった。

そして、僕はシャーミに会うことになった。

第五話：僕の回想１（後書き）

暗いですね。

第六話：出会い

『どうしたの、ぼーっとしちゃって。』

シャーミは手を広げて、思いにふけっている少年の顔の前でぶんぶんと振った。

もちろん、スーラはもう少年といえる年ではない。しかし、童顔と華奢な体つきは彼を若く見せていた。

『なんでもないよ。』

現実に引き戻されたスーラは伏せ目がちに答えた。

『ふ～ん。』

シャーミはつまらなそうに口をすぼめた。スーラの横にしゃがみこむと、長い金髪が膝にかかった。

お風呂に入り、こざっぱりとしたシャーミは大分、少女らしく見える。肩に下ろされたやわらかな小麦色の髪に着いた水滴がキラキラと光る。

行動や言動に見合わない聡明そうな青いの瞳が、切れ長の目の中で揺れている。

今晩限りでお別れだ。

スーラはシャーミの小さな頭をゆっくりと撫でた。

『スーラ？』

少女の瞳が困惑したように曇った。

『ご、ごめん。お風呂は入ってくる。』

はっとして、スーラは荷物を掴むと立ち上がった。

『本日はお招き頂きまことにありがとうございます。』

モネはそう言うと、赤い絨毯に膝をついた。

目の前の玉座の上には、年老いた国王が座っている。豪傑・・とはとてもいえない容貌。気のいいおじいちゃんって感じだ。

赤色のマントと白いひげが、なんだかサンタクロースを連想させる。

『なかなか立派になったではないか。のう、パロット男爵。』

この台詞は、毎年聞いている。

『はい、御蔭様で。』

これも。

しきたりに文句を言うつもりはない。ただ、なんとなくこんな風に同じ事を繰り返すのが、嫌なのだ。

家もクリスマスも礼拝もパーティーも。みんな、なくなってしまったらと考える。

望むものは。キラキラ光る槍・・・鎧とか。

『今日は特別な趣向を用意してみた。気に入ってくれるといいのだが。』

『趣向といいますと？』

『うむ。サーカス団とやらを呼んでみた。』

『シャーミ。正装をしなさい。』

スーラはきっぱりと言った。

『やだ。わたしも芸をしたい。こんな窮屈な格好したくない。』

シャーミも頑なに言い張る。

『今日はだめだよ。団長だって、私たちみたいな新参者は任せられないって言っていたじゃないか。今日はサーカス団にとって大事な日だ。シャーミが出ていって、失敗したどうするんだ。完璧に物に出来ている技なんか一つもないくせに。』

『それは、スーラのせいでしょ。危ないからって、ちゃんと練習させてくれないじゃない。』

『シャーミ、私の仕事を忘れてるよ。シャーミの警護だよ。』

『パーティー出ない。』

『今日は無理。団員全員が招待されたから。とにかく、ドレスを着なさい。』

『なによ。スーラの馬鹿。』

シャーミは渋々、ベットの上に置かれているクリーム色のドレスを手に取った。

『着替えるから出て行って。』

シャーミはスーラを睨んだ。明らかに腹を立てている。

スーラはうなづくともう一度背を向けてしまったシャーミを見た。

その緑の瞳の中に浮かんだ寂しさによく似た感情に、シャーミが気づくことはなかった。

ドアがコツコツとノックされた。

『お迎えに上がりました。』

『はい。』

シャーミがドアを開けると、品の良い初老の召使が立っていた。

『スーラはどこですか？』

スーラの姿が見えないので、シャーミが尋ねた。

『お連れ様は謁見の間でお待ちです。』

『謁見の間？』

なんだか嫌な予感。

『お連れしました。』

初老の召使は仰々しい装飾の施された巨大なドアを軽くノックして、声をかけた。

『さあ、どうぞお入り下さい。』

ドアが、ギギーと音を立てて開いた。

召使に促されて、シャーミはゆっくりと中に入っていった。

暗闇の中で、水の音だけが聞こえる。

少年はため息をついて、ベンチに腰を下ろした。

パーティーが始まって小1時間。早くも、お世辞の挨拶に疲れたモネはパーティー会場を抜け出して城の中庭に逃げてきた。

かなり寒いけど、あそこにいるよりはマシだ。

目を閉じて、静寂の中でゆっくり息をした。

まただ、ぼーっとしていると眠気が襲ってくる。

モネの意識が眠りの中に、落ちいきそうになったその時、

背後でガサガサと音がしたかと思うと、右肩がズシンと重くなった。

『いった。』

モネが痛みに顔をゆがめた瞬間、目の前がクリーム色になった。

ドレスがふわりと揺れる。

金色のベールが広がった。

『へ、人？』

青い瞳と薄茶色の瞳が出会った。

第7話：シャーミ

閉じて開いて閉じて・・・。

何度も目を閉じてみるけど、目の前の状況は変わらない。

派手な格好をしたおじいさん・・もといおじさん。玉座に座っているから多分王様。

『そなたがシャーミであるか。どれどれ、こちらに来て顔を見せてくれ。いや、なかなか可愛らしいじゃないか。』

『・・・。』

シャーミは状況が飲み込めず、ポカンと口を開けたままだ。

『はい。トルテ王国第3王女、シャーミ・コクトー様にてございます。ご無礼を申し訳ありません。シャーミ様は長旅でお疲れになっていて。』

シャーミは、はっとして耳慣れた声のする方を見た。

声の主はシャーミの視線に気が付くと、その美しい顔にうっすらと微笑を浮かべた。

長く垂らされた黒髪をみつあみにして、上品で地味なベージュのドレスを着たスーラは、どこから見ても模範的な侍女だった。

『どうして。』

シャーミの声が震えた。

どうして、スーラ。わたしはまだ、あなたと旅を続けたいのに。シャーミは涙が溢れるのを我慢して、唇を噛んだ。

『おっと、こちらこそ気が付かず悪いことをした。話は明日にしておこう。今日は、城でクリスマスパーティーをやっているから騒がしいと思うが、ゆっくり休んでくれ。』

シャーミの心情とは、裏腹に国王の声はどこまでも陽気に広間に響いた。

『シャーミ。待って。シャーミ!』

『嫌だ。なんで?こんなことってないよ。』

『シャーミ、待ちなさい。』

険しい声にシャーミは立ち止まった。自分がどこにいるのか、どこへ向かおうとしているのか分からない。

ぬぐってもぬぐっても溢れてくる涙で、視界が見えない。

『話を聞きなさい。もう分かっているはずですよ。一ヶ月前、叔父から手紙を受け取りました。シャーミ・・王女の身の振り方につい

てです。

ここはとても平和な良い国です。あなたはここでなら、一生幸せに生きることが出来ます。あなたのお父上が悩みに悩んで見つけてくださったあなたの生きる方法です。』

スーラは無情な言葉を優しく告げる。

『嫌！だって、あなたはいなくなってしまうんでしょう？わたしを置いていくんでしょう？　嫌だ、絶対や。もう、家族に捨てられるのは嫌。』

何を言っているのかも分からなくなった。

『私はあなたの家族ではありませんし、陛下はあなたを捨てたわけでもありません。それに家族ならここでもつくることできます。国王があなたを一生守ってくださる方を紹介して下さいます。あなたはその方と一生幸せに暮らすのです。』

『それってどうゆう・・。』

『明日、ババロア王国の第2王子の婚約発表がされます。相手は、トルテ王国第3王女シャーミ・・・』

スーラが言い終わる前にシャーミは駆け出した。

真っ暗闇の中、シャーミは無我夢中で走った。

頭の中では、スーラの言葉がグルグルと回っている。

『逃げなくちゃ、もうスーラも味方じゃなくなった。逃げて逃げて。』

気が付くと、シャーミは大きな生垣の前にいた。どうやら、庭に入りこんでしまったようだ。

周りを見渡したが、行き止まりになってしまっている。

『シャーミ、シャーミ。どこにいるの？』

スーラの声がだんだん大きくなってくる。

『え～い。』

シャーミは、生垣に手を伸ばした。

第八話：真夜中の庭で

『ご、ごめん。人がいるなんて思わなくて。痛かった？』

シャーミはおろおろしながら、何度も謝った。

『いや、僕がここにいたのが悪かったんだよ・・ってそんなことないか。うん。すっごく痛い。』

モネは正直に言うと、少し笑った。

ここは王宮だけど、突然生垣から飛び出してきた少女に対してそんなに気を使うこともないかと思い直したのだ。

『そうだよね。本当にごめん。』

シャーミは相手があまり気にしていなさそうなのに、胸を撫で下ろした。それにふんわりした癖毛がなかなかかわいらしい男の子だ。

『君は何してたの？召使って格好じゃないし。パーティーに来てる人だよね。』

クリスマスパーティーに来て生垣に飛び込む人なんて聞いたことがない。

『ええ～と、そうなんだけど。』

シャーミは困ってしまった。とても、見ず知らずの人に話せる事情ではない。

迷っていると、後ろのほうからスーラの声が聞こえてきた。

『シャーミ。どこにいるんですか？シャーミ。』

どうしよう。

『あなた、名前は？』

シャーミは慌てて、モネに向き直ると尋ねた。

『モネだけど。』

『じゃあ、モネ。お願いがあるの、ちょっとしたらここにきれいな女性が来るから、わたしは向こうに行ったっていってくれない？追われてるの。事情は後で話すわ。』

『うん、まあいいけど。』

モネは少し面食らいつつ、頷いた。

『ありがとう。』

シャーミは礼を言うと、近くの生垣の後ろに隠れた。

＊

『ここに16歳位の少女を見かけませんでしたか？』

少女の言ったとおり、5分後美しい少女が現れた。清潔で質素がいでたちは彼女が高貴な家の侍女であることを示してる。

『クリーム色のドレスの子ですか？』

モネは一応確認する。

『！はい！』

『その子なら、向こうに走っていきましたけど。』

美人に嘘をつくのは辛いな。でも、あの子本当に困ってたみたいだし。

『あの、失礼ですがパーティーのお客さまでしょうか？どうしてこのような場所に？』

暗い中庭に佇む少年を怪しく思ったのだろうか、侍女は怪訝そうに尋ねた。

『僕、パーティーとか苦手で。逃げ出してちゃったんです。』

嘘ではない。

『そうですか。お風邪など召されませんように。』

モネの返答には別段興味がそそらなかったようで、侍女はお辞儀を

すると、モネの指した方へ走っていった。

『・・もう出てきても大丈夫だよ。』

モネはシャーミが隠れているはずの生垣の方を見た。

反応がない。

まさか。

モネは生垣の後ろを覗き込んだ。

誰もいない。

『ああ～あ。なんだか面白そうだったのに。』

モネは小麦色の髪の少女を思い浮かべた。暗闇で光る猫みたいな青い瞳。

美人だったのは、侍女の方なのに気になるのは彼女の方だ。

『今度会ったら名前を聞こう。僕だけ教えたんじゃフェアじゃない。』

彼女の姿を見たとき、モネの心が微かに疼いた。

何か始まる予感がした。

第八話：真夜中の庭で（後書き）

今後のストーリー進行に迷っています。テストもあるので、更新が遅くなるかもしれませんが、よろしければ読んで下さい。もう一つの連載「リトルプラム」もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3839d/

モネの森

2010年10月14日18時25分発行